児童労働と私たちとのつながり

阿南光高等学校　二年　井口（いぐち）　愛埜（あいと）
（敬称略）

ある日の授業で、先生が見せてくれた一本の動画が、私の心を強く揺さぶりました。それは、アジアやアフリカの子どもたちが過酷な環境で働かされている様子を映したドキュメンタリーでした。まだ私たちと同じくらいの年齢の子どもたちが、重たいレンガを運び、煙の立ちこめる工場で機械を動かし、炎天下で長時間働いているその姿は、あまりにも衝撃的でした。

私はこれまで、児童労働という言葉をどこか「遠い国の出来事」のように感じていました。日本では義務教育があり、高校生の私たちは勉強に部活動、友達との時間を当たり前のように過ごしています。しかし、世界には、毎日学校に通いたくても通えず、働かなければ生きていけない子どもたちが大勢います。その事実を、私は初めて自分の目で見て、実感しました。

国際労働機関の報告によると、世界には一億六千万人以上の子どもたちが児童労働に従事しており、その多くが危険で有害な環境で働いています。彼らの多くは貧困や家庭の事情などによって、幼い頃から労働を強いられ、教育の機会を奪われています。さらに問題なのは、こうした児童労働によって作られている製品を、私たちが日常的に使っている可能性があるということです。安い衣服、チョコレート、スマートフォンの部品など、その背景には子どもたちの労働があるかもしれません。私はそのことを知って、強い罪悪感と同時に、「自分にも何かできることがあるのではないか」と思いました。例えば、商品に買うときにフェアトレード認証のマークがついたものを選ぶ。このマークは、生産者の労働環境や生活が守られていることを知る一つの手がかりです。また、ＳＮＳなどで児童労働の現実を発信したり、署名活動に参加したりすることも、意識を広める一歩になるかも知れません。しかし、こうした行動を起こす前に、まず私たちがしっかり「知る」ことが大切だと思います。世界には自分たちとは違う環境で生きている人がいること、その人たちの権利が守られていないこと、それによって不平等があること。そうした現実を見つめ、自分のこととして考えることが、人権問題と向き合う最初の一歩だと感じています。

児童労働とは単なる「貧困の問題」ではありません。教育を受けられな

いことで、その子の将来の選択肢が奪われるという「未来の問題」でもあります。勉強したくても机に向かえない、遊びたくても働かされる、夢を語る時間さえ与えられない、そんな現実が世界のどこかに存在しているということを、私たちは忘れてはならないと思います。

人権とは誰かが一方的に与えるものではなく、すべての人に生まれながらに備わっているものです。だからこそ、国や文化が違っても、子どもが子どもらしく過ごす権利は、誰にも奪われてはならないのです。

私たち高校生ができることは、まだ小さなことかもしれません。しかし、その小さな行動が、誰かの未来を守る一歩になるかもしれません。そう信じて、私はまず「無関心でいないこと」を大切にしたいと思います。コンビニでチョコレートを手に取るとき、店頭で洋服や小物を選ぶとき、「これはどこから来たのだろう」と考える、その問いを持つだけでも、世界の見え方が変わり、行動が変わるはずです。

私は将来、国際問題や人権に関わる仕事に就きたいと考えるようになりました。それは、あの動画で見た子どもたちの姿が、私の中で今も消えることなく心に残っているからです。彼らと同じ時代を生きる一人として、何か出来る人になりたいと思っています。子どもたちが夢を語れる世界を、自分の手で少しでもつくっていけるように、今ここから学び続けたいと思います。